

2013年10月までに
肺炎球菌ワクチンの接種を終えた、
現在、6歳未満の
お子様を持つ保護者の方へ。



補助的追加接種
のお知らせ



●新しい小児用肺炎球菌ワクチン(13価)の補助的追加接種について

従来の小児用肺炎球菌ワクチンより、多くの型(肺炎球菌の種類)を含むワクチンが、日本でも接種できるようになりました。従来のワクチンの接種をすべて終了した乳幼児に対しては、新しい13価の肺炎球菌ワクチンを追加で接種しておく、従来のワクチンよりも予防の範囲が広がります。

補助的追加接種の対象者

従来のワクチンを接種完了した6歳未満の乳幼児(任意接種)

接種スケジュール等について詳細はかかりつけ医にご相談ください。

●小児用肺炎球菌ワクチンについて

7価
(従来)

肺炎球菌の型
(種類)

4

6B

9V

14

18C

19F

23F

新しい小児用肺炎球菌ワクチン(13価)を接種すれば、従来のワクチン(7価)に加えて、新たな6つの型に対する免疫もできるので、予防範囲が広がります。

13価

肺炎球菌の型
(種類)

4

6B

9V

14

+

1

3

5

18C

19F

23F

6A

7F

19A

- 副反応について ワクチンを接種した後にはみられる主な副反応は、発熱、注射部位の異常(赤みや腫れなど)です。この他にも気になることや心配なことがあればかかりつけ医にご相談ください。

Q

新しく追加になる6つの型は
どのような特徴がありますか？



A

新しい小児用肺炎球菌ワクチン(13価)には、現在、肺炎球菌による重い感染症の原因として日本で一番多い型(19A)が含まれています。13価のワクチンは、**従来の小児用肺炎球菌ワクチン(7価)**よりさらに30%程度、原因となる型をカバーする割合が増えます。

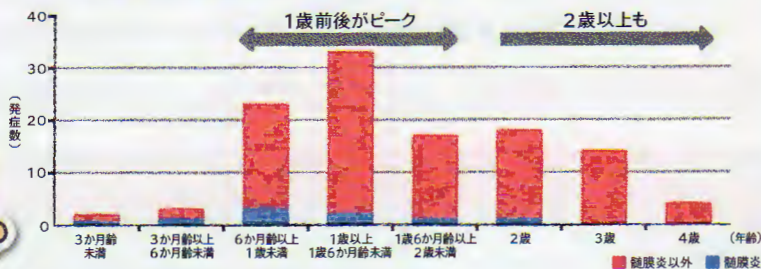
Q

重い肺炎球菌感染症は、
何歳ぐらいまでかかりますか？

A

肺炎球菌の重い感染症のピークは1歳前後で、2歳以上でもかかることがあります。ヒブと比べると上のほうの年齢でもかかりやすいのが特徴です。

■肺炎球菌による重い感染症の年齢分布(1道9県からの報告:2012年)



庵原俊昭ほか：厚生労働科学研究費補助金(平成24年度報告書)

新しく開発されたHib、肺炎球菌、ロタウイルス、HPV等のワクチンの有効性、安全性並びにその投与方法に関する基礎的・臨床的研究「小児細菌性髄膜炎および全身性感染症調査」に関する研究(全国調査結果)より作図



Q

従来のワクチンと安全性は
異なりますか？

A

日本の赤ちゃんを対象とした臨床試験から、接種後にみられる発熱、注射部位の異常(赤みや腫れなど)の割合は、従来の小児用肺炎球菌ワクチン(7価)と同等であることが確認されています。詳しくはかかりつけ医にご相談ください。

